

関東ふれあいの道 埼玉②奥武蔵の古刹を訪れるみち

渡辺 真一

2019年5月25日(土) 快晴 気温高い

参加者： 今井、大西、鎌田、近藤、高橋、鶴田、渡辺(敬称略、計7名)

コースと時間記録： 小殿 10:30～稜線 11:30～11:40 竹寺 11:52～12:15 豆口峠～12:20 豆口峠
先の樹林(昼食) 12:50～13:30 子の権現 13:50～14:30 浅見茶屋 14:40～15:10 東郷公園 15:
15～15:35 法光寺 15:40～15:45 吾野駅

まだ5月だというのに連日気温が30℃を越える日が続いていたので、暑さを心配したが予想外に爽快でさわやかな朝。9時にはほぼ全員が飯能駅北口の3番バス停に並んだ。バス停には、棒の嶺登山口であるさわらびの湯に向かうらしいグループや家族がすでに多く並んでいた。9時25分発の国際興業バスに乗車して何とか無事に全員座れた。45分ほど揺られてさわらびの湯でほとんど全ての乗客を降ろしたあと小殿バス停に到着。ここは今は飯能市となった元名栗村の中心部に近いところで、下流は人間川となる名栗川に沿った集落だ。立川名栗断層が立川から残堀川を遡り箱根ヶ崎を通り、山王峠から名栗川に到達するのが途中の原市場という場所だが、そこから断層は名栗川に沿って北上しているらしい。しかしながら、詳しいことはわからない。断層と地震は見直しがなされていて、この立川名栗断層も調査が中断してあまり現実感も深刻さもなさそうだ。

登山の準備をして小殿バス停を出発したのは10時半になっていたが、今日は一般コースで歩行予定時間も短く、焦ることはない。少しバス道を歩くと、右手にしっかり道標が示された登山口が現れる。ここから樹林の中の急登が始まる。意外とさわやかな風が通る



小殿バス停案内板



茅葺きの竹寺本殿

樹林を1時間かけて登り切ると稜線に出た。鐘楼を經由する巻き道と、同じく鐘楼を經由する尾根道が分かれているが、我々は稜線を乗越して東側を巻いていく正規の道を選択する。5分も歩くと右側に竹寺の本殿が見えてきた。



本殿入口の茅の輪

竹寺は正式には「医王山薬寿院天王山八王子」という典型的な神仏混交の寺で、天安元年丑年(857年)の建立だとか。本殿には、右手に斧、左手に索を持つ牛頭天

王坐像とその脇には八王子（牛頭天王の八人の童子）が祀られていて、12年に一度の丑年に開扉されるそうだ。本殿は20年前に焼失したが、4年後には再建されたとのこと。参道下方を眺めると、本殿への登り口には茅で編んだ「茅の輪（ちのわ）」が設けられた鳥居があった。本来はこれをくぐって心身を清めて本殿に参るべきところであったが、本殿に先に着いてしまったのでやむを得まい。本殿脇には木彫りのトーテンポールがあり、女性の牛頭天王が彫られていた。この竹寺では、春と秋に住職の法話を聞きながら精進料理が楽しめるそうだ。写真を見ると食器が全て竹で作られていて、3000円で10品、6000円コースで20品の精進料理が並び、地元の銘酒・天覧山も供されるそうだ（長い竹筒の徳利で竹筒のお猪口に注いでくれるらしい）。



竹寺からは源流に沿って道がつけられ、高度を上げながら再び稜線を西側に乗越す。しばらく歩くと豆口峠に出る。豆口峠には三角屋根の小屋があるとガイド書にあったのでそこで昼食のつもりであったが、来てみると倒壊寸前のトタン屋根（三角屋根には違いなかったが）の小さなボロ小屋がそれであるらしかった。豆口峠には「神送り場」と言う看板が立てられていた。むかし村に流行病などが起こると、村人が鉦や太鼓を叩きながらここまで来て疫病神を追い払う儀式をやったそうだ。

豆口峠から少し登った樹林の中で昼食とした。渡辺持参の冷えた缶ビールを皆で一口ずつ味わった。この頃には気温も上がっていたのでこの一口が実に美味かった。この辺りの人工樹林は杉と檜がメインで江戸の頃から西川材と呼ばれていた。当時江戸では火災が多発していたため材木が不足し、この地を流れる入間川や高麗川から荒川を経て大量の木材が江戸に運ばれた。「江戸の西」の川から運んだことから「西川材」と呼ばれるようになったらしい。



年子月日子刻に生まれた子ノ聖が、「我登山の折、魔火のため腰と足を傷め悩めることあり。故に腰より下を病める者、一心に祈らば、その験を得せしめん」と誓いをたてたそうで、現在では足腰守護の神仏として信仰されている。さらには「足」転じて、自転車・バイク、自動車の無事故

昼食を終え歩き出すと、やがて愛宕山の登り口に出る。次回通ることになる関東ふれあいの道③の「伊豆ヶ岳を越えるみち」に合するところだ。子の権現は直ぐその先。このコースでは、竹寺と同様に参道からではなく裏からいきなり本殿に出る。子の権現は竹寺より少し新しいが、同じ平安時代の911年の建立という。正式には「天台宗特別寺子の権現天龍寺」という名称で、和歌山県にて子



交通安全を祈願する人も多いとか。奉納されたわらじに書かれた願い事を読んでみると、「足腰がいつまでも丈夫なように、88歳」とか、「足の痛いのが治りますように、100歳」とかあって、人間の果てない欲望に半分あきれた。鶴田さんも2足セットになったわらじを購入されていた。本来1足は境内に納めるのが習わしだが、ご主人の分にするとかで2足とも持ち帰られたようである。ちなみに子の権現のある場所は、西側を流れる名栗川と東側を流れる高麗川の分水嶺になる。次回の伊豆ヶ岳を越える道もこの分水嶺を忠実に歩く事になる。なお、高麗川は曼珠沙華で有名な巾着田を経て、方向を南東から北東に流れを変えて坂戸で都幾川（ときがわ）に合し、やはり飯能辺りで北東に方向を変えてきた入間川に川越市の北の川島で合し、直ぐその先で荒川に合する。

子の権現からは西吾野駅に下る舗装路を途中で分け、つづら折りの急坂を下る。いい加減急坂が嫌になる頃、降魔橋を渡り浅見茶屋に到着して一休み。実はこの先の車道が予想以上に長く、午後の暑い日射しの下を黙々と歩いた。ようやく、開けたところに出たらそこが東郷神社だった。ここでトイレと水飲み休憩。さらに歩く事20分、思いがけず出て来た最後の上り道を越えたら吾野駅が見えた。駅手前の曹洞宗法光寺に立ち寄り、1386年に開かれた3つ目で最後の古刹を眺めてこのコースを終了した。





GPS 軌跡図と高度グラフ